

子どもの居場所の現代的特徴－習い事教室の事例から－

Salient Features of Third Place for a Child in Modern Times -Case of Cram School and Learning Class-

氏 名:井上 由美子

戦後の日本は大きな社会変化を遂げ、経済の復興は目覚ましく、それに伴い、人々や子どもの生活スタイルも変化していった。そんな中、近年、子どもの居場所論が広がりを見せ、多くの子どもの育ちを身近な地域で支援することを目的とし、行政においても様々な形で取り組みがなされている。この背景には、現代の諸問題から見える、子どもの自己喪失への危惧、心の拠り所となる居場所の無さがある。

現代の社会で生きる子どもにとって、それぞれの居場所をどのようにつくるか。不登校や貧困に陥る子どもに対しての居場所づくりは、今日、数多くの試みがある。しかし、本来、全ての子どもにとって心の拠り所となる居場所は必要である。つまり、現代社会において、特段問題のないような一般の子と言われるような子どもにとっても必要であり、その子どもの居場所となる空間が、塾や習い事教室においても見出され、形ではなく子どもの心に寄り添う習い事教室として存在するのではないか。一見して子どもの居場所と捉えられにくい教室と呼ばれるような場、または個人で営む小規模な子どもの集う場であっても、その場を運営する大人による、現代における緩やかなコミュニケーションや関係を生み出す独自のマネジメントと工夫があり、その現代的特徴を持った場こそが子どもにとって居場所となり得ているのではないか。そして、その場において、現代の子どもの実態に応じた大人の関わりの中で、子どもがどのように変化しているか、さらにはその居場所の内外で、子どもが居場所感を持ち、主体性を持って活躍できる参画の機会を見据えた手法があり、子どもが主体となって存在できる空間となっていないか。これらを摸索しながら運営する大人のマネジメント力によって、その教室は持続可能なものとなり、これからの未来を担っていく人材を育てる役割を果たしているのではないか。

本論文の研究の目的は、学びの場としての空間における「子どもの居場所の現代的特徴」を明らかにすることであり、習い事教室を運営する大人のマネジメントと工夫を通じて、子どもが居場所を感じ、その場において、主体性を持って参画しているかを見出す。

本論文の研究は、第1に、既存の文献、資料、先行事例を踏まえた上で、現代における子どもの居場所の定義を示し、その定義が習い事教室の特徴としてどのように活かされているかを分析する。第2に、塾、習い事教室を対象としたフィールド調査を行い、それぞれの教室における大人のマネジメントと工夫の中で、子どもの居場所感、主体性やその場における参画の有無を考察する。

本論文では、習い事教室としての子どもの居場所の現代的特徴について分析、考察したが、全ての子どもにとって居場所は必要であり、習い事教室に限らず、家でもなく学校でもない第3の居場所として、地域に多様かつ多くの子どもの居場所をつくらなければならない。そのためには、全ての子どもがその多様な居場所を自ら選択でき、行き来しながら、成長と共に新たな居場所を見出すことができる社会となるよう、現代を生きる子どもが求める居場所のあり方を、今後も摸索していく必要がある。

論文構成

第1章 研究の背景と目的

第1節 研究の背景、第2節 問題の所在、第3節 研究の目的、第4節 研究の方法、第5節 論文の構成

第2章 近年に見る子どもを取り巻く環境の変化

第1節 家族・家庭の変化

第1項 家族構成と家族形態、第2項 女性の社会進出、第3項 出生率

第2節 教育の変化

第1項 学校週五日制の導入、第2項 授業時数、第3項 国際化・情報化への対応

第3節 子どもと家庭の福祉の変化

第1項 ひとり親家庭、第2項 児童養護、第3項 子どもの虐待

第4節 子どもの生活の変化

第1項 子どものメディア利用 第2項 塾・習い事教室

第3章 子どもの問題行動

第1節 非行の動向

第1項 非行少年の検挙・補導人員と罪種、第2項 薬物乱用

第2節 校内暴力

第3節 家庭内暴力

第4節 いじめ

第5節 登校拒否・不登校

第6節 自殺

第4章 子どもの居場所

第1節 子どもの居場所の必要性

第2節 現代における子どもの居場所の定義

第3節 子どもの居場所の構成要素

第1項 主観的条件、第2項 客観的条件、第3項 子どもの居場所の分類から見る社会的居場所と人間的居場所

第4節 居場所に必要な要素と子どもの参画

第1項 居場所に必要な「駄菓子屋的居場所」とは、第2項 居場所と子どもの参画

第5節 行政における「学校を核とした地域力強化プラン」

第1項 地域学校協働活動ー地域で子どもを支える活動概念ー、第2項 放課後子ども塾、

第3項 地域学校協働活動から見る子どもの居場所としての課題

第6節 子どもの居場所としての習い事教室

第5章 子どもの居場所としての習い事教室の事例分析

第1節 調査の目的、対象者、調査方法

第2節 事例研究の調査結果

第3節 調査結果の分析と考察

第4節 習い事教室にある子どもの居場所の現代的特徴

第6章 結論と今後の課題

第1節 結論

第2節 今後の課題

論文の概要

本論文は、昨今、放課後に塾や習い事教室に通うことが、多くの子どもの時間の過ごし方となっている中で、単なる知識の獲得だけではない、学びの空間における工夫がどのようになされているか、教室を運営する大人のマネジメントのあり方や子ども同士の関わりによって、個々の子どもがどのように主体性を持って活動し、その場において参画しているかについて調査した。これに際し、現代における子どもの居場所の定義を示し、学びの空間、人間関係、個々の子ども、それらをマネジメントする大人のあり方の視点から分析した。そして、子どもの居場所の現代の特徴を考察し、これからの将来、社会を担っていく子どもにとって、居場所の重要性とその居場所のあり方について方向性を示した。

日本社会は、戦後の目覚ましい経済成長によって大きく変化した。便利で快適に過ごせるようになった社会に伴い、人々の生活スタイルも変化し、特に女性の社会進出は目覚ましく、夫婦共働き世帯が増加した。そのような現代社会は、子どもを取り巻く環境においても同様に大きな変化をもたらした。しかし、豊かな社会となった一方で、子どもが置かれている現状には現代社会にとって多くの課題がある。その一つが、子どもの不登校問題である。文部科学省が2016年に発表した不登校児童生徒の数は、全小中学生に占める割合として調査以来最も多くなった。この他にも、いじめの質の変化、家庭内暴力の増加など、子どもが心身共に健やかに育成しているとは言い難い現状があり、行政や教育機関も様々な取り組みを進めているが、改善は容易ではない。この背景には様々な要因があげられるが、筆者は、子どもの「居場所のなさ」を要因の一つとして取り上げた。ここで対象となる子どもは、いわゆる「一般の子」「普通の子」と言われるような子どもが対象であり、塾や習い事教室に通う子どもである。不登校児童生徒や貧困家庭における子どもについての居場所論は数多くあるが、特段に問題が見られないような子どもにとっても居場所は必要であり、そのような子どもが多く通う塾や習い事教室に焦点をあてた。現代社会において、遊ぶ時間もなく忙しく毎日を過ごす子どもにとって、安心でき癒され、自己承認、自己回復できる居場所はあるか、一見、居場所として捉えられにくい塾や習い事教室が子どもにとって居場所となっているのではないかという問題意識を持って研究を行った。

本論文は、6つの章から構成されている。第1章では、研究の背景、問題の所在、研究の目的、研究の方法に関して述べた。

第2章では、戦後から高度経済成長期、情報化社会を通して、子どもを取り巻く社会環境の変化を述べた。ここでは、メディア機器や電化製品の普及に伴い、それらが子どもの生活環境にどのように影響を及ぼしたか、また、家族のあり様についての変化も調査した。グローバル社会が進む中で、生活環境がどのように変化してきたかについて、多角的な視点から述べた。

第3章では、現代の子どもが引き起こす問題行動について述べた。社会の変化に応じて子どもの非行問題やいじめ問題は深刻化、複雑化している。どのように深刻化、複雑化しているかを、問題行動別に述べた。

第4章では、現代における子どもの居場所の定義を示し、学びの空間、人間関係、個々の子ども、それらをマネジメントする大人の視点から現代の特徴を述べた。そして、子どもの居場所の構成要素には関係性と空間性があることを述べ、さらに、それを社会的居場所、人間的居場所、それらが融合する公私的居場所、一時的居場所に分類した。また、子どもの居場所に必要な要素として「駄菓子屋的要素」を示し、その要素は、子どもの居場所としての習い事教室にとって、重要な大人のあり方であることを述べた。

第5章では、フィールド調査で得た事例をまとめ、第4章に示した現代における子どもの居場所の定義を振り返りながら、子どもの居場所としての習い事教室の現代の特徴と、その場をマネジメントする大人の「駄菓子屋的要素」の有無について分析した。調査対象は、筆者が兵庫県姫路市在住であり、自身も

地元において子どもの居場所づくりを進めていることから、兵庫県姫路市を中心とした関西エリアを選定した。特に、個々の教室の現代的特徴を見出すため、小規模ながらも個人で営んでいる学習の場に焦点を当て、個人で営む塾や習い事教室、小規模教室を意として選んだ。各調査対象には、運営者への多角的なインタビューを行う中で、教室を運営するきっかけとなった経緯や実際の運営方法を聞き取り、運営者が、現代における子どもの実態をどのように把握し、その上で、どのように子どもと関わりながら教室運営を工夫、持続させているか、また、その関わりの中で、子どもの変化があるか否かを聞き取ることを、調査内容とした。その中で、個々の子どもがその場においてどのように主体性を持って参画できているかを分析し、習い事教室が現代の子どもにとって、社会的な居場所でありながらも人間的な居場所となるような空間であるかを考察した。

第6章では、子どもの居場所としての習い事教室には、その学びの空間において、受け入れてもらえる安心感を得ながら、個々の子どもに沿った社会参加ができ、そこに居る大人、友達、仲間と関わることで多様な学びがあり、相互関係による新たな自明性を得ることで、子どもは自分の存在感や価値観を獲得して自己肯定、自己承認できる、現代的特徴があることを結論づけた。そして、その子どもの居場所をマネジメントする大人は、多彩な子どもの心や欲求に快く関わり、特に、心の教育を意識した学びの空間において、子どもが安心感、充実感を得られるよう、また、心の拠り所となるような工夫を行う、担い手となっていること、それにより、子どもはその場において、主体性を持って学びと人間関係づくりに取り組み、自分の存在感、価値観を見出しながら自分づくりができることを見出した。

本研究では、子どもの居場所としての習い事教室には、その学びの空間において、受け入れてもらえる安心感を得ながら、個々の子どもに沿った社会参加ができ、そこに居る大人、友達、仲間と関わることで多様な学びがあり、相互関係による新たな自明性を得ることで、子どもは自分の存在感や価値観を獲得して自己肯定、自己承認できる、現代的特徴があることが明らかとなった。そして、その子どもの居場所をマネジメントする大人は、多彩な子どもの心や欲求に快く関わり、特に、心の教育を意識した学びの空間において、子どもが安心感、充実感を得られるよう、また、心の拠り所となるような工夫を行う、担い手となっている。それにより、子どもはその場において、主体性を持って学びと人間関係づくりに取り組み、自分の存在感、価値観を見出しながら自分づくりができると結論づけた。

しかし、塾や習い事教室に限らず、子どもが求めている居場所とはどのようなものか、子どもの居場所にはどのような要素が必要なのかを、我々大人がさらに見極め、地域に多様で多くの居場所を用意し、全ての子どもが自ら選択でき、移動できる、第3の居場所を見つけられるような社会にしなければならない。そのためには、現代を生きる子どもがどのような状況に置かれているか、社会の動向や状況を広い視野を持って把握し、そこから子どもを振り返る必要がある。多様な居場所をつくるという意味において、習い事教室の他にも、商店や美容室など、様々な場所が居場所をつくることは可能である。そのような社会になれば、子どもの居場所は地域で連携でき、緩やかなネットワークの中で維持されていくだろう。